

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2012年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	現代心理学部映像身体学科・准教授	加藤千恵 印
研究課題	中国煉丹術の研究 — 体内における煉丹術関連文献・図像の解読及び背景にある思想の解明	
研究期間	2012年度	
研究経費	500円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は、中国の煉丹術の発生、成立、展開について、これまでまだ研究の及んでいない資料を解読し、総合的な煉丹術史の構築を目的とする。煉丹術には、鉱物薬を器物のなかで煉る「外丹」と、もともと身体に具わる気や液を身体の中で煉る「内丹」の二種類がある。外丹に関しては化学史の分野にいくつかのすぐれた研究があるが、内丹に関してはまだ解明されていない要素が多く、その成立についても定説はない。そこで、内丹関連文献の解読を進め、解題作成と一部翻訳によってわかりやすく解説し、さらには内丹が生まれた背景にある古代の宇宙論や身体観について、従来の道教史の枠を超え、術数、医学、倫理思想を視野に入れつつ調査・執筆し、一冊の学術書にまとめて出版することを目標とする。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

[身体] [道教] [煉丹術]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

基本的には個人で煉丹術書の解説作業を進め、関西在住の2名の研究協力者(垣内智之、秋岡英行)とともに大阪及び和歌山において6回にわたって「中国煉丹術研究会」を開催し、解説の正誤を検討しながら研究を進めてきた。研究会は下記の日程で行われた。

- 第1回 2012年7月21日於大阪市立大学
- 第2回 2012年8月22日於大阪市立大学
- 第3回 2012年8月31日於大阪中央公会堂・9月1日於和歌山市内
- 第4回 2012年10月13日於大阪市立大学
- 第5回 2013年3月2日於クレオ大阪・3月3日於大阪中央公会堂
- 第6回 2013年3月29日於クレオ大阪・3月30日於クレオ大阪

まずは各人が関連資料を収集しながら、『入薬鏡』『金丹大要』『女丹合編』の三点の煉丹術経典を読み進め、加藤、垣内、秋岡がそれぞれ分担して解題を作成し、全部もしくは一部を翻訳して、第1回研究会にてそれらの解題と訳文を検討した。

第1回研究会で出た問題点を各自が持ち帰り、さらに調査を進めて解題と訳文を修正し、第2回研究会にて第二校を検討した。

第2回研究会でさらに生じた問題点を各自が持ち帰って修正し、第3回研究会には、三経典の解題と訳文の第三校を検討し、完成させた。

次に「煉丹術とは何か」及び「煉丹術のコスモロジー」と題する総合的な解説文に着手し、第4回研究会にて煉丹術の発生・歴史、煉丹術を支える道・陰陽五行・八卦等の枠組み、五臓・気脈等の身体観について、いかに解説すべきかを皆で検討した。さらに煉丹術書『靈宝畢法』の解題と訳文第一校を検討した。

第4回研究会で生じた問題点を各自調査を進めて修正し、第5回研究会にて二篇の解説文と一篇の解題・訳文の第二校を検討した。第6回研究会、前回に挙げた問題点を修正し、二篇の解説文と一篇の解題・訳文の第三校を重ねて検討し、完成させた。

まとめると、2012年度は下記の七つの成果を出すことができた。これらはすでに文章化されているが、ほとんどが未発表である。解説文「煉丹術のコスモロジー」の一部は、「相い雑わること錦のごとしー「術」の五行」、「道教における養胎の思想」と題して公表した(下記「研究発表」欄参照)。成果はそれぞれ質、分量ともに論文1篇分以上に相当する。

- 『入薬鏡』解題及び訳文の作成(執筆は加藤が担当)
- 『金丹大要』解題及び訳文の作成(執筆は垣内が担当)
- 『女丹合編』解題及び訳文の作成(執筆は秋岡が担当)
- 『靈宝畢法』解題及び訳文の作成(執筆は秋岡が担当)
- 解説文「煉丹術のコスモロジー」の執筆(加藤が担当)
- 解説文「煉丹術とは何か」の執筆(垣内が担当)
- 「内経図」の図解(加藤が担当)

古典文献を翻訳するというのは、われわれにとっては非常に時間と労力を要することである。難解な煉丹術関連書に関しては、とくに慎重に複数の目で確認しながら行う必要がある。翻訳だけでも大きな成果が得られたという自負があるが、今回の翻訳作業の過程においては副産物も多く生まれた。少し専門的になるが、今回得られた、将来の研究につながる重要なテーマについて紹介したい。いずれも道教学会において順次公表してゆく予定である。

一つは、中医学における重要な脈のうちの二脈である「任脈」と「督脈」という身体の正中線を通して頭部と腹部を循環する気脈と同じ気のルートを、唐代の内丹書『入薬鏡』

研究成果の概要 (つづき)

に見いだすことができました。これは、まだまだ不明な点の多い中医学と道教の交流について知るための大きな材料となるだろう。

もう一つは、『女丹合編』という女性のための内丹書を丹念に読むことによって、これまでになかった修行面から見た女性観が明らかになってきた。女丹書は、女性の修行者の要望によって清朝に至ってはじめて生まれた画期的な書であり、女性の身体的特徴である乳房の役割と月経を考慮して活かした修養法が説かれているが、月経を止める修行過程には、不浄とされてきた経血を断つという意図が見える。女丹書を記したのは男性修行者であるが、その文面から読み取れる複雑な女性観は、道教の分野を超える、より普遍的な中国社会を知りうる情報である。

さらに、複数の煉丹術書を精読することにより、煉丹術の重要基本概念が次々と明らかになるとともに技法や理論がいかに伝えられてきたのかがわかってきた。たとえば多くの煉丹術書に見える「順であれば人となり、逆であれば丹を生み出す」という順と逆の概念を最初に主張し始めたのは『金丹大要』であるということが判明した。「逆」の意味は、一般に時間逆行のことであると解釈されてきたが、そればかりでなく男女の性質の顛倒や子が母を生むということの意味することがある。これらの逆の概念は象徴的に修行過程のなかに組み入れられている。

内丹において最上の薬材とされてきた「精・気・神」の正体は何なのかは、経典によって理解が異なるが、ある程度整理できた。また、内丹のなかにさらに設定される「内丹」「外丹」の語は、これまで多くの人々を迷わせたが、これらがいわゆる外丹とは無関係であること、内丹修行者の身体観が入れ子構造になっており、それを表すために内外の語が用いられていることがわかってきた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① 加藤千恵、相い雑わること錦のごとしー「術」の五行、『術の思想』風響社、2013年出版予定 (校正中)
- ④ 加藤千恵、道教における養胎の思想、第1回 Templeton 東アジアの科学と宗教国際ワークショップ「東アジア世界の知の伝統：科学と思想、宗教のあいだ」報告書、2012年、pp.162-166 (日本語)、pp.167-172 (朝鮮語)